

感覚表現における言語ゲームの可変性

— ウィトゲンシュタイン「私的言語」論に注目して —

平田 仁胤

(2009年10月6日受理)

Variability of the Language Games of Expressing Sensations:
Focusing on Wittgenstein's "Private Language" Argument

Yoshitsugu Hirata

Abstract: The purpose of this paper is, by focusing on Wittgenstein's "Private Language" argument, to demonstrate that Wittgenstein's philosophy does not approve of conformism. Philosophers of education have studied Wittgenstein's philosophy in terms of Wittgenstein's Rule Following Considerations. According to these studies, education as initiation into a language game is that educators train learners to imitate those who follow established rules; Wittgenstein's philosophy approves of conformism. However, these studies failed to see the significance of Wittgenstein's "Private Language" argument because they have given much attention to Wittgenstein's Rule Following Considerations. His argument points out two kinds of rules: the First Person Authority and the Third Person Norm, and indicates the possibility of discrepancy between them. In dissolving the discrepancy, the First Person Authority and the Third Person Norm can alter each other gradually. This alteration suggests variability of the language games in expressing sensations. His argument clarifies the possibilities of the variability. Education as initiation into a language game is training learners not to imitate those who follow established rules, but to become members who share the varying processes of language games with others.

Key words: "Private Language" argument, First Person Authority, Third Person Norm, discrepancy, variability

キーワード: 「私的言語」論, 一人称権威, 三人称規範, 矛盾, 可変性

1. はじめに

哲学者ウィトゲンシュタインの名は、教育学において広く知られている。教育哲学研究に対しても彼の哲学は強い影響を及ぼしている。とりわけ、ウィトゲンシュタイン規則遵守論は、ソール・クリプキによる独

創的な解釈に刺激されるかたちで、積極的に受容されてきた¹⁾。

先行研究の多くが、クリプキの解釈に基づき、教育を言語ゲームへのイニシエーションとして捉えてきた [Winch 2006, ウィリアムズ 2001, 宮寺 2007, 米村 1996]。これらによれば、共有された生活形式を基盤とする言語ゲームにおいて、学習者は周囲の実践を模倣するよう訓練され、新たな言語ゲームの担い手になるという。

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員: 坂越正樹 (主任指導教員), 河野和清,
樋口 聡, 丸山恭司

だが、この方向でのウィトゲンシュタイン解釈を進めることは、教育を単なる「体制順応主義」 [Cuypers

1995: 128] へと還元してしまう危険性を残している。イニシエーションを過度に単純化して教育を捉えるならば、既存の言語ゲームを無条件に肯定し、学習者を単なる言語ゲームの模倣者として位置づけてしまう。それらの研究は、言語ゲームにおける言語の用法を、規則とのアナロジーにおいて考察している。そのため言語の用法を固定的に捉えてしまう傾向があり、この危険性を惹起しているといえる。

もちろん、先行研究の中には、ウィトゲンシュタインに体制順応主義を帰さないものもある [Haafte 1995, Marshall 1985, Smeyers & Burbules 2008, Stickney 2008]。ウィトゲンシュタイン規則遵守論だけではなく、彼の「私的言語」論にも注目する Smeyers は、ウィトゲンシュタインが個人の経験と言語共同体との「微妙なバランス」 [Smeyers 1995: 123] を指摘しているという。しかしながら、その「微妙なバランス」がどのようなものかは詳述されることはない。体制順応主義を否定する研究は不十分なままにあると言わざるを得ない。

しかし、ウィトゲンシュタイン自身も述べているように、たとえば、感覚表現の言語ゲームにおける規則は固定的ではない。この言語ゲームにおいて、感覚を表現する個人と言語共同体との間に生じ得る矛盾を相互調整する営みがある。しかも、両者の相互調整を通じて規則が変化し得ることをウィトゲンシュタインは示唆している。その意味において、ウィトゲンシュタイン哲学は、必ずしも体制順応主義を支持するとは言えないのである。

本稿では、彼の「私的言語」論に注目することによって、ウィトゲンシュタイン規則遵守論に着目するだけでは捉えられなかった、規則の可変的側面を描き出すことを課題とする。まずは「私的言語」論を概観し、従来の解釈を検討する。この作業を通じて、本稿の課題に答えたい。

2. 「私的言語」とその不可能性

2.1. 「私的言語」とは何か

「私的言語」論は一般的に、ウィトゲンシュタインの後期哲学の名著とされる『哲学探究 *Philosophische Untersuchungen*』の第243節から第315節までの節で扱われているとされる。

だが、「私的言語」の定義を述べることは難しい。その理由は2つある。まず1つは、ウィトゲンシュタイン自身が「私的言語」という言葉を以て意味するところが不明瞭であることが挙げられる。彼は「私的言語」を精緻に概念定義していない。もう1つは「私的

言語」という言葉の意味上、具体的事例を提示しづらいことが挙げられる。これについては後に触れる。

それでも「私的言語」の問題圏を提示することはできる。先行研究の多くが注目するように、ウィトゲンシュタインは『哲学探究』の第243節、第256–258節において、「私的言語」を提示していると考えられるからである。まず第243節から引用する。

しかし、誰かが自分の内的体験——自分の感じ、気分など——を自分だけの用途のために書きつけたら、口に出したりできるような言語を考えることもできるのだろうか。… [PU: § 243]

ウィトゲンシュタインは、「私的言語」論の冒頭部、すなわち『哲学探究』の第243節において、人間が自らの「内的体験」——痛みや痺れなどの感覚や、喜怒哀楽などの気分——を自分自身のためだけに書き記し、言葉にすることは可能かという問いを立てる。

この問いに答えることは困難ではない。たとえば、偏頭痛に悩まされる人物が、頭痛を覚えるたびに、日記などに自分で発案した記号を記入する。この日記を見返すことで、偏頭痛が発生する周期や回数を特定することができる。この結果から医者や相談のうえ処方薬を有効に服用することもできる。この意味において「内的体験」を自分自身のために書き記すことは可能である。

それでは「私的言語」は、厳密ではないにせよ、容易に概念規定を獲得してしまうのか。そうではない。この偏頭痛の事例は「私的言語」には当てはまらない。第243節の続きを引用しよう。

…つまり、直接的で私的なその者の感覚を指し示すはずなのである。それゆえ、他人はこの言葉を理解することができない。[PU: § 243]

ここでウィトゲンシュタインが想定している言葉は、他人には直接的に知覚されない感覚それ自体を指し示すものである。ウィトゲンシュタインは次のように続ける。

さて、私の内的体験を記述し、私だけが理解できるような言語についてはどうだろうか。如何にして私は自分の諸感覚を言葉によって表記しているのか。…私の感覚語は、私の自然な感覚表出と結びついているのか。——その場合には、私の言語は〈私的〉でない。他人も私と同様、それを理解できよう。——しかし、もし私に感覚の自然な表出がなく、感

覚だけがあったとしたらどうか。今や、私は単純に名と感覚とを結びつけ、それらの名を記述に用いるのである。[PU: § 256]

「私的言語」は、「内的体験を記述し、私だけが理解できるような言語」であって、私以外の人間の理解に開かれていない。偏頭痛の事例で用いられた記号は、私以外の人間にも理解の余地が残されている。発案された記号の意味を説明されれば、主治医は記号の意味を理解するかもしれないからである。したがって、この事例で用いられる言語は「私的言語」ではない。ウイトゲンシュタインによれば、「私的言語」は感覚や気分といった私秘的で本人にとって自明の体験を指し示しながらも、他人には全く理解されない。この第256節に続く第257節において、ウイトゲンシュタインは「感覚の自然な表出」のない感覚の事例として、痛みを覚えつつも「人間が自分たちの痛みを表出しない(呻かず、顔をゆがめない、等)」[PU: § 257] ことを挙げている。

2.2. 「感覚日記」, 「甲虫」, 正当化

そして、ウイトゲンシュタインは第258節において「感覚日記」と呼ばれる議論を行っている。感覚の自然な表出を欠き、他人には知覚される余地のない感覚と名前とを結びつける行為として、「E」を日記に書き込む行為を挙げる。

次のような場合を想像してみよう。私は、ある種の感覚が繰り返し起ることについて、日記をつけたかと思っている。そのため、私はその感覚を「E」なる記号に結びつけ、自分がその感覚をもった日には必ずこの記号をカレンダーに書き込む。… [PU: § 258]

この「私的言語」としての「E」は、端的に記号として「内的体験」を表すだけであり、他人が観察して理解することは一切できない。「E」が痛みや痒みといった感覚を表しているのか、それとも不愉快な気分を表しているのか、他人には判断できない。「E」と記入する本人にとって、「E」という「内的体験」が発生しているにすぎない。それゆえ、本人以外には理解不能の言語であるとされる。

だが「E」も何らかの記号である以上、それが何を表現しているのかを問う余地はある。少なくとも「E」が何らかの「感覚」を表していることを説明することはできる。この意味では「E」は私以外の人間に開かれている。よって「E」は他人にも理解できるため「私的言語」ではないのではないか。このような疑念が浮

かぶかもしれない。

この疑念は先に述べた「私的言語」を定義する困難と密接に関係する(2.1. を参照)。「私的言語」の議論それ自体に、その具体例を提示することの困難性が伴っている。仮に、ウイトゲンシュタインが「私だけに理解できるような言語」を定義したとしても、それを具体的事例として提示することはできない。彼は「E」という具体例を提示してはいるが、『哲学探究』を読む人間が「E」を理解すれば、すでにそれは定義上、「私的言語」ではあり得ない。ウイトゲンシュタイン以外の人間が理解してしまっているからだ。逆に、ある具体的に示されたものが「私的言語」の定義を満たしている場合、それは意味不明の何かでしかない。もはや「言語」と呼ぶに値しないかもしれない。入不二[1990]の指摘するように、ウイトゲンシュタインがより「私的言語」に近似する事例を示しつつも、全き「私的言語」を提示しないのは故なきことではない。「感覚日記」で述べられている記号「E」は、「私的言語」により近い「言語」であったとしても、「私的言語」としては不十分である。

この困難さにもかかわらず、先行研究は「感覚日記」の議論とともに、ウイトゲンシュタインの「甲虫」の比喩を引用し、「私的言語」の不可能性を主張してきた。この比喩において、ウイトゲンシュタインは「内的体験」を甲虫になぞらえる。

各人が箱を一つ持っており、その中には、私たちが「甲虫」と呼んでいるようなものが入っていると仮定しよう。何人もそれぞれ他人の箱を覗き込むことができず、各人とも自分の甲虫を見ることによつてのみ、甲虫とは何か分かるのだ、と言う。——この時、各人とも自分の箱の中に異なったものを持っていることが、当然ありえよう。そのようなものが絶えず変化している、と想像することさえできよう。——だが今、この人々の「甲虫」という語に用法 Gebrauch があるとすれば? ——そうならば、それは物の名称 Bezeichnung ではないだろう。箱の中の物はそもそも言語ゲームに属していない。何かとしてすら属していない。というのも、箱が空でさえありうるのだから…。[PU: § 293]

各人は自らの感覚を知覚しつつも、他人の感覚を知覚できない。通常、私たちは、それを「痛み」と呼び、痛みの報告を行う。各人の感覚に、同じ「痛み」という表現を与えられてはいるが、実は各人によって異なる感覚だったり、感覚が常に変化しているかもしれない。場合によっては感覚が生じていないかもしれな

い。しかし「痛み」を用いる言語ゲームは円滑に営まれる。この時、「内的体験」としての感覚は、何の役割も果たしていない——この極端に行動主義的な考え方が引用箇所の趣意である。

そして、ワイトゲンシュタインが行動主義的な視点を持つとされ、「私的言語」の不備も指摘される。「私的言語」は言語の公共性を備えていない。すなわち、「E」の不可能性は、言語に備わべき正当化が欠如していることに起因する。

「E」をある感覚の記号と呼ぶことに、如何なる根拠があるか。つまり、「感覚」というのは、私たち共通の言語に含まれる言葉であって、私だけに理解されるのではない。それゆえ、この言葉の慣用は、すべての人が了解するような正当化を必要とする。
… [PU: § 261]

「E」は、当人にとって「E」としか呼べないような「内的体験」が生じた場合に日記に記入される。だが「E」は「名称」としての要件を満たしていない。「名称」は真偽を問う言語実践と結びついている。たとえば、ある人物が切り傷をみつめ表情を歪めながら「痒い」と言えば、それは正しい表現ではない。おそらく「痛い」と言うように訂正される。当人の「主観的な正当化」[PU: § 265]は、言語の慣用において認められない。なぜなら「正当化とは、人が何か独立した所へ訴えることによって成り立つ」[PU: § 265]からである。

このようにして、先行研究の多くはワイトゲンシュタインの「私的言語」が不可能であると主張しているのである [伊藤 1995, ウィリアムズ 2001, 中村 1997, 野矢 2005, 村上 2005]。たとえば、中村 [1997] は「甲虫」の議論を引用し、次のように述べている。

他人の痛みに関しては、そのふるまいにおける規準によって痛みの有無を判定し自分の痛みについては、同じ表現を用いることによってそこから直ちに言語ゲームが始まるのであって、そこに実体的な痛みが存在する必要などまったくないということである。[中村 1997: 45]

これを以下「標準的解釈」と呼ぶこととする [cf. 関口 2001] が、この解釈を安易に認めることは控えない。というのも、「私的言語」の議論を慎重に検討することによって、その妥当性に疑問がふさがるためである。

3. 「標準的解釈」の妥当性への懐疑

3.1. 血圧計の比喩

「標準的解釈」は、「内的体験」の役割を過小評価ないしは不要のものとする。正当化の欠如した「私的言語」は言語ではないと主張する。逆に言えば、言語の機能として正当化の役割を重要視している。したがって、「内的体験」が生じているか否かに関係なく、その表出が正当化の条件を満たしているのであれば、「内的体験」を伴う表出もそうでないものも同様に扱われると考えるのである。

だが、この「標準的解釈」の主張を容易に認められるだろうか。強い痛みを覚えるから、それだけ強く痛みを訴えることもあるだろうし、あまりに痛みが強いため一言も言葉を発しないこともあるだろう。感覚表現の言語ゲームにおける「内的体験」の役割を「標準的解釈」は十分に評価しているとはいいがたいように思われる。

「内的体験」の表現を正当化する規準にも疑問の余地がある。たとえば、「鋭い痛み」と「鈍い痛み」を区別するためには、どのような規準が必要となるのか。「鋭い」という言葉はナイフやペン先の状態、もしくは刃物の切れ味などを表現する。したがって、鋭いナイフと同じような痛みならば、「鋭い」を痛みに対して当てはめればよい、と考える向きもあろう。しかし、ここで「同じ」とは如何なる意味において主張されるのか。もしくは何をもって「同じような」痛みとするのか。ナイフの鋭さには、目に見える鋭さや手で触れて感じられる鋭さがある。視覚的な鋭さと触覚的な鋭さは、果たして「同じ」だろうか。同様に、それらは痛覚的な鋭さと「同じ」だろうか [丸田 1997: 177]。

仮に、正当化を「内的感覚」を表現するための前提条件とするならば、事態は奇妙なことになってしまう。ワイトゲンシュタインの血圧計の比喩が、この奇妙さを説明している。この比喩は、ある特定の「内的体験」が生じている時、必ず血圧が上昇することを血圧計が示す、というものである。この感覚と血圧計との相関関係に気づいた後ならば、その感覚を覚えるときには、血圧が上昇していることが分かる。血圧計が「内的体験」の正当化の手段として用いられるのである [PU: § 270]。「標準的解釈」に従えば、私たちは自分たちの感覚を伝えるために、血圧計に頼らなければならない。血圧計の測定結果が血圧の上昇を示していないならば、その特定の感覚が生じていることを主張できなくなってしまう。

さらに思考実験を進めよう。血圧計が故障したとし

て、誰もそれが気づかないとする。血圧計が血圧の上昇を示しても特定の感覚は生じず、また、その感覚が生じているとしても血圧計が血圧の上昇を示さない。それでも私たちは、正当化の手段である血圧計を経由してでしか感覚を表現できないのである。

この事態の奇妙さは、改めて述べる必要はないだろう。実際には血圧計を用いなくとも、この特定の感覚は表現されるからだ。つまり、ワイトゲンシュタイン自身が主張するように「ある語を正当化することなく用いるということは、それを不当に用いるということではない」[PU: § 289] のである。

血圧計の比喩に鑑みるならば、「標準的解釈」の主張するような行動主義を、ワイトゲンシュタインに帰すことはできないだろう。

3.2. 「感覚日記」, 「甲虫」, 「正当化」の再検討

ここで、ワイトゲンシュタインの論点を明確にするために、先行研究においてあまり注目されなかった「感覚日記」と「甲虫」の後半部を再検討したい。なお、この節でワイトゲンシュタインは、仮想対話者と議論を進めている。どちらの主張が明確化するために、引用者による改行を加えている。

私がまず言いたいのは、この記号 [「E」] の定義を述べることができないということだ。

にもかかわらず、私は自分自身に対しては、一種の直示的定義 *hinweisende Definition* として定義を与えることができる！

如何にして？ 私はその感覚を指し示すことができるのか。

普通の意味ではできない。しかし私は、その記号を口にしたたり、書いたりして、自分の注意をその感覚に向ける——それゆえ、いわば心の中でそれを指し示す——。

でも、何のためにそのような儀式をするのか。というも、そのようなことは儀式にしか思えないからだ！

でも、定義は記号の意味を確定するのに役立つ。ところが、そのことはまさに注意力の集中によって行なわれる。なぜなら、そうすることによって、私は記号と感覚との結合を心に銘記するのだから。

もっとも「心に銘記する *Ich präge sie mir ein*」というのは、このような出来事を経過すれば、私が将来正しくその結合を思い出すようになる、ということではない。しかしこの場合、私にとってその正しさについての規準などない。そこでひとは言うかもしれない。私にとっていつも正しいと思われることが正しいのだと。そしてこのことは、ここで『正

しい』ということについて語るができないということではない。[PU: § 258。□ は引用者補足]

「直示的定義 *hinweisende Definition*」とは、ある対象を指し示しながら言葉を発して、直接的に定義を与える行為を言う。たとえば、椅子を指し示して「これは椅子だ」といった行為が挙げられる [PU: § 6]。そして、ワイトゲンシュタインは「E」という記号が「その正しさについての規準」を持たないために、感覚を「指し示す」ことができないことを議論している。よって、自分自身で自らの感覚を定義する「直示的定義」が正しいとも誤りとも語れないという。

だが、ワイトゲンシュタインは、「標準的解釈」が指摘するように、単に「私的言語」が不可能だと主張してはいない。彼の批判は、仮想対話者の言葉である「記号と感覚との結合」という想定に向けられている。

仮想対話者によれば、「記号を口にしたたり、書いたりして、自分の注意をその感覚に向ける」など、「心の中でそれを指し示す」ことで、「記号と感覚との結合」を形成する。一度形成されれば、それは十分に「正当化」[PU: § 265] される。しかし、想像においてなされる行為は正当化の要件を満たさないとワイトゲンシュタインは応える。それは「想像の中で時計を眺めること」[PU: § 266] によって時刻を確認すること、「自分の想像の中で作られている橋の寸法設計を、私がまず想像の中で橋の材料の強度試験を行うこと」[PU: § 267]、「私の右手が金を左手に渡すこと…私の右手が贈与証を書き、左手が受領証を書くこと」[PU: § 268] と同様である。これらの行為は正当化の要件を満たすことはなく、そもそも正当化の対象とならない。仮想対話者の「記号と感覚との結合」を形成する行為は、その意味において「儀式」でしかないのである。「血圧計」[PU: §§270-271] の比喩は、この「記号と感覚との結合」を批判する文脈に位置づけられる。

ワイトゲンシュタインは「甲虫」の議論の後半部において、自らの議論が「対象と名称」モデルの批判であると述べている。

すなわち、感覚表現の文法を「対象と名称 *Gegenstand und Bezeichnung*」というモデルにしたがって構成するならば、当の対象が関係ないものとして考察から抜け落ちてしまうのである。[PU: § 293]

この「対象と名称」モデルは、ワイトゲンシュタインが『哲学探究』において批判の対象として据えた、アウグスティヌスの言語観に他ならない [Baker &

Hacker 1980: 17]。ワイトゲンシュタインによれば、アウグスティヌスの言語観とは、言葉の一つひとつが対象を名指しており、それら名指しの結合が文章を構成している、そして、それらのどの言葉も一つの意味をもつ、という考え方である [PU: § 1]。ワイトゲンシュタインの主眼はあくまで「対象と名称」モデルの批判にある。

「対象と名称」モデルのみに基づく言語観において、感覚表現を捉えるならば、それは「私的言語」という想定を招来し、その不可能性を露呈してしまう。したがって、このモデルのみにとらわれることなく、感覚表現は捉えられなければならない。ワイトゲンシュタインの論点はここにある。

「標準的解釈」の妥当性に対して疑義がふさされるのは、それが「対象と名称」モデルに傾斜していることによる。この解釈は「内的体験」を表す「E」が「名称」の要件を満たしていないため、真偽を問う言語実践と結びつかないとしていた。真偽を問うことのできない「名称」は、もはや言語に属しているとは言えず、したがって「私的言語」は不可能であるとも結論づけた。だが、感覚表現に正当化は必ずしも必要ではない。

ワイトゲンシュタインは「対象と名称」モデルにとられない感覚表現について、次のように述べる。

空の青さを眺め、自分自身に向かって「何て青い空なんだろう！」と言ってみよ。——君が自然にそうするとき——哲学的な意図などなく——、この色彩印象は自分だけのものだという考えは、君の頭に思い浮んでこない。そして君は、この叫びを他人に向けることを躊躇しない。また君がこの言葉で何かしらを指し示すなら、それは空なのだ。私が言いたいのはこういうことだ。人が「私的言語」について思いをめぐらしているとき、『感覚を名ざす』ということにつきものの、自分自身の内部を指示しているという感じ das Gefühl des In-dich-selber-Zeigens を君は抱いていないということだ。また君は次のようなことも考えない。自分が本来手でその色を指し示すべきではなく、注意を向けるだけで指し示すべきなのだとも。(「注意を向けることで何かしらを指し示す」ということが何なのか考えてみよ) [PU: § 275]

「何て青い空なんだろう！」と叫ぶことで「色彩印象」を語り、それを他人に向けて発することに問題は生まれえない。おそらく他人もその言葉を理解し、共感を示したり、無関心な態度をとったりするだろう。ここで「私的言語」において前提とされていた、感覚と言葉

との厳密な対応関係は不要なのである。

4. 感覚表現における一人称権威と三人称規範

ワイトゲンシュタインの「私的言語」論は、「対象と名称」モデルの問題点を指摘するものであった。だが、それは「対象と名称」モデル批判にとどまらず、私たちの感覚表現の規則についても論じている。すなわち、感覚表現における一人称権威と三人称規範である。まずは、三人称規範について述べる。これは、実は「標準的解釈」が強調した論点と深く関係している。

4.1. 三人称規範

ワイトゲンシュタインは「対象と名称」モデルを批判しているが、それが必ずしも誤謬だと断じてはいない。彼はこのモデルのみに依拠することの問題点を指摘している。言い換えるならば、ある意味においては「対象と名称」モデルが機能する感覚表現の言語ゲームが営まれるのである。

先にも述べたように、ある人物が、切り傷をみつめ表情を歪めながら「痒い」と言えば、それは正しい表現ではない。その訴えが第三者に適切に伝わらないこともあるだろうし、「痛い」と言うように訂正されることもあるだろう。その人物は、自らの属する言語ゲームが定める感覚表現の用法、つまり、三人称規範に従わなければならないのである。

たしかに「標準的解釈」には「対象と名称」モデルへ過剰に傾斜してしまうという問題点があった。しかし、当人の主張が第三者の視点から介入され得る、という感覚表現の規則を解明している点において、それは単なる誤謬ではないのである。

4.2. 一人称権威

感覚表現の規則には三人称規範だけではなく、一人称権威が存在する。そして、この一人称権威を裏書きするものとして、不可謬性と私秘性が挙げられる。

4.2.1. 一人称の不可謬性

まずは、感覚の不可謬性について扱う。ワイトゲンシュタインは感覚を「知る」ということについて、次のように述べる。なお、この引用もワイトゲンシュタインと仮想対話者との主張を混同しないために、引用者による改行を加えている。

…私たちが「知る」という語を、正常な方法で用いられるように用いるとき…他人はきわめて頻繁に、いつ私が痛みを感じているかを知る。

——たしかに。しかし、私が自身で痛みを知ることと同じ確実さで知るのではない！

—私に関して、一般的には(冗談などは除いて)、私は自分が痛みを感じていると知っている、などと言うことはできない。[PU: § 246]

この節は一人称言明と三人称言明との非対称性を指摘している。他人は「私」がいつ「痛み」を感じているかを、容易に「知る」ことができる。他人が苦痛に歪んだ表情を浮かべることがあろう。その意味で「彼は私が痛みを感じていることを知っている」という表現は不自然ではない。しかし、反対に「私は私が痛みを感じていることを知っている」と表現することは不自然である。

もちろん、ウィトゲンシュタイン自身が譲歩するように、何かしらの「冗談」でこの表現を用いることもあろう。誰かが私の頭痛を信じてくれないので、苛立ち紛れに「私は自分が痛みを感じていることを知っている」と言うこともあろう。

だが、私の痛みはあまりにも自明であって、あらためて「知っている」と表現することはない。「知っている」と言うことは、「知っていない」と言うことの可能性を含意していなければならない、それは私の痛みには起こり得ない。たとえば、「私はコロンブスが1492年にアメリカ大陸に到着したことを知っている」と言うとしよう。これは誰かに教わらなかつたり、教科書の類を読んだりしなければ、知らなかった可能性を含んでいる。しかし、私が自分自身の痛みを知らないという可能性は考えられない。仮に「私は頭痛を感じているが、たまたまそのことを知らない」と言うとなれば、それは要するに、頭痛を感じていないことなのである [cf. Cavell 1969=2002: 260, 西阪 2008: 27-28]。

したがって、痛みは当人にとって極めて自明であり、「痛み間違える」などということは考えられない。当人の痛みは、不可謬である。

4.2.2. 一人称の私秘性

次に私秘性を扱う。当人の感覚は当人にとってこそ切実である。当人の代わりに他人が痛みを感じることはできず、当人が痛みを引き受けねばならない。他人が私の痛みを知ることと、私がある痛みを感じることは、本来的に性質の異なる事柄である。当人にとって不可謬の感覚は、他人にとってはそうではない。

この事実から、懐疑主義的な議論にしばしばみられるように「痛みは当人のみが知り得るのであり、他人の痛みは知り得ない」と主張することは正しくない。もし、当人のみ知ることが可能なのであれば、他人が痛みを知ることへの懐疑は問題にはならないはずである。

むしろ、この懐疑は感覚を誤解したり理解し損ねた

りする余地、あるいは言葉にできなかったり伝えられなかったりする余地を示していると考えられる。他人の痛みを完全に知ることはできないが、ある程度は知ることができるというのが、実状であろう。ウィトゲンシュタインは次のように「私的な体験」について述べている。

私的な体験について本質的なのは、本来、各人が自分固有の模範 Exemplar を持っていることではなく、他人もこれを持っているのか、それとも何か別のものを持っているのかを誰も知らないということである。[PU: § 272]

感覚表現の日常的な実践において、感覚を偽ったり、隠したりする。「他人」の「私的な体験」については誰も知らない」ということが「本質的」なのである。当人には自明であるにもかかわらず、第三者の視点からは知られないことがある。感覚は私秘的なのである。

以上、一人称の不可謬性と私秘性について概観した。当人にとって感覚は不可謬であり、他人には秘されている。そして、それらは感覚表現の一人称権威を裏書きしている。たとえば、痛みを感じている当人が、痛いから「痛い」と言えば、それは正当化を必要とすることなく痛いのだと認められる。他人が当人の痛みの感覚を否定しようとしても——懐疑論を議論している場合などを除いて——当人の主張が最優先される。なぜなら、自分の感覚を間違えることはなく、かつ、それは他人には秘されているためである。それゆえ、当人による感覚表現は、嘘や冗談といった懐疑の余地がない場合は認められるのである [cf. PU: § 248]。

5. 感覚表現における規則の可変性

これまでの議論において、ウィトゲンシュタインの「私的言語」論が感覚表現における一人称権威と三人称規範を指摘していることを確認した。ここで私たちは、ウィトゲンシュタイン哲学が体制順応主義を支持しないことを論証する手立てを獲得したことになる。すなわち、一人称権威と三人称規範との相互調整が織り成す、感覚表現における規則の「可変性 Variabilität」[BPP2: § 627] を展望する地点にいたのである。

ここで Cavell のウィトゲンシュタイン解釈を参考にしつつ、その可変性を確認したい。Cavell によれば、事実として、他人の痛みは分からない。しかし／だからこそ、その痛みを表現しようとするし、他人の痛みの表現を理解しようとする試みすることも事実であるという [Cavell 1969=2002: 260]。

Cavellはこの事実を時計の比喩を用いて説明する。時計は故障などを起こして、規則正しく針を進めないかもしれないし、その動きを止めてしまうかもしれない。いずれの場合でも時刻を時計から知ることはできない。しかし、それでも時計は時刻を伝えるものであり、そのような時計の観念を抱くことは自然であるという [1979: 343]。

この時計と痛みを表現する身体とを類推的に考えることができる。つまり、相手が「筆舌に尽くしがたい」独特の振る舞いをしたり、もしくは何も振る舞わなかったりしたとしても、その人と向き合い関係を作り上げていくためには、その振る舞いが何を表出しているのかに想像力を働かせなければならない [Cavell 1979: 354]。

「私的言語」はCavellにとって「幻想 fantasy」である。しかし、それは単なる理論的誤謬ではない。「私的言語」を定位する試みが失敗するのは、私たちの言語が感覚の深淵に到達しえないことの証左である。自分の感覚を表現することすら、意のままにならないのであり、相手を理解することには「避けられない失敗」と「避けられない成功」が伴う。この失敗と成功とに「私たちは絶えず分離させられるが、それに理由はない」のである [Cavell 1979: 361-369]。

Cavellの指摘は常識的なものではあるが、重要である。なぜなら「私的言語」論が、固定的な「文法」に規制された言語ゲームという見方から私たちを解放し、感覚表現における規則の「可変性」[BPP2: § 627]を示唆するからである。

Cavellの指摘を、本論の視点から考察しよう。一人称権威と三人称規範とが互いに理想的な調和を保つことはある。当人による感覚表現と、他人によるそれへの理解との間に、問題となるような矛盾がまったく生じない場合である。しかし、両者に齟齬をきたすこともある。たとえば、人間は「筆舌に尽くしがたい」感覚を覚え、それを表現しようと試行錯誤し、誤った表現や独特の表現を用いることがあろう。周囲の人々はその表現を理解できないにもかかわらず、訂正を加えないとする。ここで「筆舌に尽くしがたい」感覚は、三人称規範において適切な位置を持たない。にもかかわらず、一人称権威を備えた感覚表現として尊重されている。

そして、この齟齬は、主題化されることなくそのまま保たれたり、また、両者の相互調整に向かったりする。たとえば、先の人物が、何度も感覚を伝えようとすることで、他人から共感されるなど、しかるべき対応が得られるかもしれない。時には、その表現が伝播し定着するようになるかもしれない。つまり、一人称

権威が三人称規範を変化させている。もちろん逆に、先の人物の表現が訂正の対象となり、「それは『痺れるような痛み』と言う」と訂正されるだけのこともある。既に「筆舌に尽くしがたい」感覚は、「痺れるような痛み」としての位置を確保しているかもしれない。三人称規範の拘束力により、一人称権威が機能しないこともある。

このように感覚表現の言語ゲームは、一人称権威と三人称規範とが常に相互調整を行いながら、営まれている。時として、両者の間に理想的な調和が成立したり、また、一方が他方と完全な矛盾を起こしていずれかの改変へとつながったりすることがある。しかし、このように極端な調和あるいは矛盾は稀であろう。むしろ、感覚表現の言語ゲームは、一人称権威と三人称権威とが相互に調整を進めながら営まれる、流動的かつ多様なやりとりだと考えられるのである。

ウィトゲンシュタイン自身は「雑踏 Getriebe」[BPP2: § 625]という比喩を用いて、この可変性を指摘する。雑踏は、一方では恒常的な往来によって成立するが、他方ではどこからともなく始まり、どこからともなく終わるものである。そこに明確な境界線は存在しない。雑踏は雑踏のままでありながら常に変化している [BPP2: §§624-627]。この雑踏の比喩に示されるような「可変性それ自体が、欠くことのできない振る舞いの特徴」[BPP2: § 627]だとウィトゲンシュタインは述べる。

したがって、感覚表現の規則は、固定されたレールの如きものではない。先行研究が主張するような固定的な「規則」を見出すことはできないように思われる。ウィトゲンシュタインが言語ゲームにおいて「やりながら規則をでっちあげる」[PU: § 83]と述べる事態も、上述の様態をあらわしていると考えられる。感覚表現の言語ゲームは、「対象と名称」モデルにしたがって当該感覚を記述することではない。むしろ、「それとともに始まる」[PU: § 290]、可変的な営みだと言えるのである。

6. おわりに

本論は、ウィトゲンシュタインの「私的言語」論に注目することによって、ウィトゲンシュタイン哲学が体制順応主義ではないことを明らかにした。これは従来の研究がウィトゲンシュタイン規則遵守論に焦点化していたために看過されがちであった論点である。

感覚表現の言語ゲームは、一人称権威と三人称規範とが織り成す相互調整のゲームであり、流動的で多様な人間のやりとりを許容する素地を、本来的に備えて

いる。ここで教育の場面に目を向けるならば、一人称権威と三人称規範の規範性は均等ではないと言える。たとえば、言語ゲームの学習者は、未だその成員として認定されないため一人称権威を備えていない。「筆舌に尽くしがたい」感覚の独特の表現は誤りとされ、単に訂正の対象となる。反対に、教育者の三人称規範の規範性は極めて強力である。本来的に流動的である感覚表現の言語ゲームにおいてすら、学習者と教育者の非対称性は免れない。

しかしながら、先行研究のように言語ゲームへの参入を、学習者による単なる規則の模倣とすることはできない。学習者は言語ゲームの成員として認められるに従い、一人称権威を備えるようになる。そして、一人称権威を備えた主体として、三人称規範との相互調整を絶え間なく行う存在となるからだ。この意味において、言語ゲームへの参入は一方的ではない。むしろ、学びの主体が、一人称権威を備えた主体として、三人称規範との相互調整を行う存在となること、それが言語ゲームとしての教育の重要な側面の一つとして指摘できるのである。

【注】

1) ウィトゲンシュタイン規則遵守論とは、心理的・実在的な規則観を批判し、人間の「規則に従う」ことを扱う議論である。心理的・実在的な規則観によれば、人間は実体としての規則を心あるいは脳に内在化させ、その規則を解釈などによって応用し、当該規則が及ぶ範囲内のあらゆる具体的な事柄に対応するのである。たとえば、学習などにより「+2」という算術の規則を内在化させ、それを応用することによって「2, 4, 6, ...」と数列を書き続けることが可能となると考えるのである。この心理的・実体的な規則観では、規則の応用の際に解釈の無限遡行に陥ってしまうとウィトゲンシュタインは批判をしている[PU: §201]。クリブキは、このウィトゲンシュタインの批判に注目し、共同体という観点から規則に従うことを説明する。つまり、心理的・実在的な規則を裏付ける事実など存在せず、規則に従うことは共同体の成員における一致した反応によって説明される。共同体が「2, 4, 6, ...」と続けることを否定しない限りにおいて、その人物は規則に従っているとされるのだという[野家編 1999; 山本信・黒崎宏編 1987]。なお、このクリブキ解釈に対する批判は、Miller & Wright (eds.) [2002] に詳しい。

【引用・参考文献】

- Baker, G. P. & P. M. S. Hacker 1980. *An Analytical Commentary on Wittgenstein's Philosophical Investigations*, Vol.1, Chicago: University of Chicago Press.
- Cavell, S. 1969=2002. "Knowing and Acknowledging", *Must We Mean What We Say?* New York: Cambridge University Press, pp.238-266.
- Cavell, S. 1979. *The Claim of Reason*, New York: Oxford University Press.
- Cuypers, S. 1995. "What Wittgenstein Would Have Said about Personal Autonomy", P. Smeyers & J. D. Marshall (eds.), *Philosophy and Education: Accepting Wittgenstein's Challenge*, Dordrecht, Boston and London: Kluwer Academic Publishers, pp.127-141.
- Haaften, W. V. 1995. "Wittgenstein and the Significance of Private Meaning", P. Smeyers and J. D. Marshall (eds.), *Philosophy and Education: Accepting Wittgenstein's Challenge*, Dordrecht, Boston and London: Kluwer Academic Publishers, pp.47-62.
- Marshall, J. D. 1985. "Wittgenstein on Rules: Implications for Authority and Discipline in Education", *Journal of Philosophy of Education*, Vol.19, No.1, pp.3-11.
- Miller, M. & C. Wright (eds.) 2002. *Rule-Following and Meaning*. Montreal: McGill-Queen's University Press.
- Mulhall, S. 2007. *Wittgenstein's Private Language: Grammar, Nonsense, and Imagination in Philosophical Investigations*, §§243-315, New York: Clarendon Press.
- Smeyers, P. 1995. "Initiation and Newness in Education and Child-rearing", P. Smeyers & J. D. Marshall (eds.), *Philosophy and Education: Accepting Wittgenstein's Challenge*, Dordrecht, Boston and London: Kluwer Academic Publishers, pp.105-125.
- Smeyers, P. & N. C. Burbules, 2008. "Education as Initiation into Practices", M. A. Peters, N. C. Burbules & P. Smeyers, *Showing and Doing: Wittgenstein as a Pedagogical Philosopher*, Boulder: Paradigm Publishers, pp.183-197.
- Stickney, J. 2008. "Wittgenstein's 'Relativity': Training in Language-games and Agreement in Forms of Life", *Educational Philosophy and Theory*, Vol.40, No.5, pp.621-637.

- Winch, Ch. 2006. "Rules, Technique, and Practical Knowledge: A Wittgensteinian Exploration of Vocational Learning", *Educational Theory*, Vol.56, No.4, pp.407-421.
- Wittgenstein, L. 1953=1984. "Philosophische Untersuchungen", G. E. M. Anscombe u. R. Rhees (Hrsg.), *Wittgenstein Werkausgabe*, Bd.1, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (藤本隆志訳「哲学探究」『ウイトゲンシュタイン全集 8』大修館書店, 1976年。PUと略記)
- Wittgenstein, L. 1980=1984. "Bemerkungen über die Philosophie der Psychologie Bd.2." G. H. von Wright u. H. Nyman (Hrsg.), *Wittgenstein Werkausgabe*, Bd.7. Frankfurt am Main: Suhrkamp. 1980=1984. (野家啓一訳「心理学の哲学——2」『ウイトゲンシュタイン全集 補巻2』大修館書店, 1988年。BPP2と略記)
- 伊藤邦武, 1995, 「デカルト批判・私的言語の議論」飯田隆編『ウイトゲンシュタイン読本』法政大学出版局, 167-180頁。
- 入不二基義, 1990, 「私的言語論における言語ゲーム——『哲学探究』257節, 258節, 261節の解釈を中心に——」『哲学雑誌』第105巻第777号, 199-216頁。
- ウィリアムズ, M. 2001, 宍戸通庸訳『ウイトゲンシュタイン, 心, 意味——心の社会的概念に向けて——』松柏社。
- クリプキ, S. 1983, 黒崎宏訳『ウイトゲンシュタインのパラドックス——規則・私的言語・他人の心——』産業図書。
- 関口浩喜, 2001, 「ウイトゲンシュタインの「私的言語論」をめぐる予備的考察——あるいは〈転倒したゲーム〉をめぐる——」『福岡大学総合研究所報』第249巻, 89-113 (1-25) 頁。
- 中村昇, 1997, 「後期ウイトゲンシュタインと独我論」『順天堂医療短期大学紀要』第8巻, 44-52頁。
- 西阪仰, 2008, 『分散する身体——エスノメソドロジーの相互行為分析の展開——』勁草書房。
- 野家啓一編, 1999, 『ウイトゲンシュタインの知88』新書館。
- 野矢茂樹, 2005, 「私的言語の不可能性はどうか論証されるか」『哲学雑誌』第120巻792号, 109-132頁。
- 平田仁胤, 2007, 「ウイトゲンシュタイン規則論の学習論的意義——「ウイトゲンシュタインのパラドックス」の検討を通じて——」『教育哲学研究』第95号, 71-88頁。
- 丸田健, 1997, 「痛みの描写の言語ゲーム——内的状態に対する外的基準の要求は一般化できるか——」『年報人間科学』第18号, 171-181頁。
- 丸山恭司, 2000, 「教育において〈他者〉とは何か——ヘーゲルとウイトゲンシュタインの対比から——」『教育学研究』第67巻第1号, 111-119頁。
- 宮寺晃夫, 2007, 「言語・規則・共同体——言語哲学の社会的=教育的インプリケーションを読み取る——」『教育哲学研究』第96号, 1-21頁。
- 村上綾, 2005, 「私的言語はなぜ不可能なのか」『千葉大学社会文化科学研究』第10号, 23-33頁。
- 山本信・黒崎宏編, 1987, 『ウイトゲンシュタイン小事典』大修館書店。
- 米村まろか, 1996, 「〈教育内容〉の同一性と共同性——ウイトゲンシュタインのパラドックスをとおして——」『名古屋大学教育学部紀要(教育科学)』第43巻第1号, 79-94頁。

【付 記】

本稿は日本学術振興会科学研究費補助金「特別研究員奨励費」による研究成果の一部である。